

2013年6月24日

第17号

自然と文化だより

発行:NPOシニア自然大学校

自然と文化科

*****目次*****

P1 代表挨拶

「100人体制にチャレンジを！」

P2 今号の TOPICS

雨に咲く花 「アジサイ」

P3 10周年を迎えて

P4 新任幹事のコーナー

武田尾 草本調査

P4 仲間たちの近況報告(1)

1班 私のふるさと“鳥取”

P5 仲間たちの近況報告(2)

2班 今年は花見三昧

3班 シナノキ

P6 仲間たちの近況報告(3)

4班 吹田市江坂・今昔

P7 リレー随筆

最近の所感

P7 俳句・川柳・絵画サロン

◇自然と文化だより

17号に投稿頂いた皆様、有難うございました。新しいコーナーの設定を考えていましたが頂いた皆さんの原稿が沢山で紙面がなくなり次号以降になります。今号の TOPICS は季節から児玉さんの“雨に咲く「アジサイ」”を戴きました。梅雨の前半は雨の少ない日が続きました。夏野菜を植えている方も多いかと思います。昨今の恵みの雨で少し息を吹き返すのではないのでしょうか。合わせて熱中症対策は我々には部屋の中に居ても忘れてはいけないようです。

N.Take

「100 人体制にチャレンジを！」

代表 肥塚 眞

新体制が4月にスタートし、皆様のご協力のお陰で、当科もようやく順調に滑りだし軌道に乗り始めました。

本年度は科が発足して10年目の節目に当たります。科員も15人増えて総勢95人となり、研究部の中でも昨年同様最大の所帯です。

「来る者は拒まず、去る者は追わず」の基本方針を堅持いたしますので、これからも科員は増え続け、来年度はいよいよ二桁を越えると思われ、喜ばしいことです。

しかしながら、100人以上のグループが自然観察であれ、歴史・文化散策であれ、同一行動を取るには様々な問題が生じます。路線バスの利用や市街地での大勢の歩行は地域住民に迷惑を掛けることになり、バス旅行の手配や施設見学にも制約を受けることが予想され、従来とは異なる工夫が求められます。

過去、いろいろ議論はされましたが、明確な結論を出せずに、現在に至っております。幸い、この3年間は80人台で推移しており、何とか支障なく活動が続けてきましたが、いよいよ真剣に検討することが求められて参りました。100人体制になっても、周りに迷惑を掛けずに、参加者が楽しめる活動を目指したいと思います。

本年度は運営委員会を中心として、新体制を検討し、具体的な対応策を打ち出したいと考えております。

また、上記以外にも、10周年記念誌の発行、研究発表の再現などの課題があります。皆さんと、知恵を出し合い、創意工夫して、常に進化する、明るい希望の持てる科を目指そうではありませんか。

科員全員が積極的に事業に参加し、全ての活動が「参加して楽しく、心が通い合う」ように、ご支援、ご協力を宜しくお願い申し上げます。



雨に咲く花 「アジサイ」

児玉 勝久

6月、雨の季節を象徴する花は「アジサイ」であろう。花の少ない季節でもあり、これほど雨に似合う花も少ない。アジサイは「アジサイ科」の落葉低木で日本固有種、名の由来は集真藍(あずさあい)、つまり真の藍色の小花が集まった姿から付けられたという。ガクアジサイが母種とされ、藍色の小花

に見えるものは、実はガク片で本当の花弁はごく小さく目立たない。真



の花には雄しべも雌しべもあるが結実もしない。(母種であるガクアジサイは結実する。)

一方、アジサイの花の色は栽培される土質に大きく影響され、酸性の土では青色系、アルカリ性の土では紅色系が映えたとされる。また、花の咲き始めから白や薄緑、薄青、淡紅、藍、紫などへと日を追って花色を変えるので、「七変化」などという別名



もある。これに因むのか、花言葉は「移り気」。中国名は「八仙花」。『万葉集』には「よひらのほな」(四枚の花びらの意味)として登場する。

余談ではあるが、幕末に長崎に来ていたシーボルトは著書『日本植物誌』の中で、アジサイを *Hydrangea otakusa* と命名、発表し世界に広めた。しかしなぜ学名に「アジサイ」ではなく「オタ

クサ」の名をつけたかは長い間ナゾであった。後に彼の愛人であった長崎の遊郭の女性「お滝さん」に因んだことが判った。この女性に花の名を献上したらしいが、これにカンカンに怒っていたのが、植物学者の牧野富太郎であったとのこと。昭和2年の「植物研究雑誌」の誌上で、言葉の限りを尽くしシーボルトを批判している。要約すると、シーボルトは勝手に和名を変更して自分の聞で目尻を下げた女の名を用い、花の神聖を汚したと論じている。最後に「アア可哀想ナあじさいヨ」とまで嘆いている。牧野博士がこの日本原産の花をいかに愛していたかが伺える。(産経抄 2009.6.9 より)

アジサイには栽培品種も多く、大きく分けて日本アジサイと西洋アジサイ(学名のハイドランジアと呼ばれる)がある。後者は日本のものが中国を経てロンドンに入ったのが始まりで、19世紀には紅花種が登場、その後もオランダ、ベルギー、フランス等を中心に品種改良が進められ、現在では400～500種が作りだされている。日本種とは異なり、鉢植え用が多く、室内で楽しめるのが特徴とされる。

アジサイは花の少ない梅雨どきが花期で、群生して無数の花房をかかげたさまには独特の風情がある。このため、各地に名所と称される寺院や公園があり訪れる人も多い。近郊では『六甲山』が有名で、山上には5万株のアジサイが咲くとされる。見ごろは山上であるため、7月、火成岩の風化した酸性土壌に咲く藍紫の大輪の花は特に素晴らしい。

広義のアジサイの中には前述の「アジサイ」の他に「ガクアジサイ」及び「ヤマアジサイ」を含めることが多い。「ガクアジサイ」とは集散花序の中央部の両性花の集団を囲む装飾花をガクに例えて命名されたもの。品種改良によって、さまざまな色の花が作り出されている。『アジサイ』も本種の改良種のひとつである。

山中に自生するアジサイの仲間の花も形状的には両性花と装飾花からなり、花の色は里育ちの「アジサイ」とは異なり、装飾花は白色のことが多い。暗い林内にあってはむしろ白色である方がよく目立つためであろうか。これ等の仲間には「ヤマアジサイ」「ガクウツギ」「ノリウツギ」や、つる性の「ツルアジサイ」「イワガラミ」が知られている。なお、山中に咲く「コアジサイ」は装飾花を持たず、淡青～白色の両性花だけからなる。山中では最も早く咲くアジサイとされ、5月末の箕面観察会でも見られることがある。

10周年を迎えて

来るべき15周年に向かって

武井 貢

・「自然と文化科の10周年記念誌」を平成25年度中に作成

2003年（平成15年）の秋、シニア自然大学本部で講座生の終了後の受け皿として2研究科の新設が企画された。これを受けて 高等科修了生の受け皿として、2004年（平成16年）4月に高等科2期修了生を核にして 科員19名（1期2名、2期17名）で、自然と文化科が設立された。平成25年は自然と文化科ができて、10年目を迎えた。科員も着実に増加し95名になった。調査研究部門では科員数は1番の科である。

私は高等科6期を卒業し、創立5年目の研究科としての体裁が整った「自然と文化科」に入科した。科員数は私たちが加わって69名となった。今年で6年目だが、当科が どのようにして、生まれ、どんな活動をして、現在の体制を整えてきたのか、詳しくは知らない。

そこで設立10周年を迎えるに当たり、ひとつのステップとして、創設当時の先輩たちが在籍されている間に 当時の資料を掘り起こして提供していただき、科が歩んできた道のりを振り返り、そこから多くを学び、より確かな未来に進んでいくために、又、基礎と発展を支えてくださった人たちの創意工夫と努力を記録にとどめ、以って今後の歩むべき指針と更なる発展のために記念誌を作成する。

・外向きの要素を加えた社会貢献活動の推進

開かれたNPOにするため、認定NPO法人に平成27年8月に申請できるように準備してきているが、認定NPOの制度改正に伴う一層の公益性（公益活動に事業比率を50%以上にすること）の向上を求められているので、科のあり方も前向きに体制を見直し、外向きの社会貢献イベント等に率先して参加できる体制・対応方法を検討し、整える必要がある。認定NPOについてはハードルが高いが、公益性の高さ維持のため、かなりのNPOが目指しており、NPOの一つのステータスとなる傾向にある。

・科員100名超へ対応方法の事前検討

今年度の科員数は既に95名である。退科者が非常に少ないので 平成26年度は100名を超えたと予想される。従って、活動の方法、科員相互間の更なる親睦を図る方法等の再検討を急がなくてはならない。場合により、「体制検討委員会」を再度立ち上げて検討する必要がある。

10周年を迎え、シニア自然大学校の中核組織、シンクタンクとして、当科の伝統ある諸活動を引き継ぎつつ、実績を踏まえて、原点を見つめなおして、新たな決意で、より拡充、充実させ、時代の変化に対応しながら、自主独立の精神を持って事業を進めるとともに、科員の“ほっ”とする居場所として、よりよき自然と文化科を目指し、来るべき15周年に向かって歩んで行こうではないか。皆様のご支援、ご協力をお願いしたい。

武田尾 草本調査

3 班 大庭 健

ひょんなことから（？）調査委員会を担当することになり、おまけに武田尾の草本（個人的には全く不得意な）調査を、一年を通して実施することになりました。

第一回の調査を 4 月 15 日に行ったのですが、その種類の多さ、似たようでそれぞれが特徴を持った植生の幅広さ、そして皆さんの知識・経験の広さに圧倒された、というのが実感でした。

その中でも、個人的に興味を持ったのは、在来種と帰化種（幕末・明治初期以降渡来の）せめぎ合いがこのような場所でも行われている事でした。よく言われるカンサイタンポポとセイヨウタンポポ、タネツケバナとミチタネツケバナ、そして同定した 41 種（蕾、花、実の付いたもののみ）の内、実に 10 種が帰化種でした。

特に、ヒメリュウキンカという園芸用に栽培されている花が群生しているのには驚かされました。この種は 1992 年に大阪・淀川河川敷で初



めて逸失しているのが確認されたそうです。わずか 20 年の間にどのようにしてここまでの

どりついたのか、さらに驚いたことには 5 月 16 日の調査では、誰かに盗掘されたのか、ほとんどの株が無くなっていました。

大げさに言えば、開国以降約 150 年の間、自然と文化の相互作用の中で日本の植生（特に人里の）は大きく変わっていているのでしょうか、その歴史の 1 ページをこの一年間で垣間見られたらいいな…と思っています。

一般科員の方の参加も歓迎しますので、一緒に



『ワイワイ、ガヤガヤ 楽しもう！そしてちょっぴり勉強！』（調査委員会の今年のモットー）してみませんか！！

←どっこい生きていたヒ

メリュウキンカの実

私のふるさと“鳥取”

1 班 飯田 正恒

私は「因幡の白ウサギ」説話で知られる鳥取の、古事記の地名では「氣多郡＝けたごおり」に生まれ 18 年をすごしました。明治以降は“氣高郡”となり、平成大合併で鳥取市となって郡は消滅しましたが、行政の都合で愛着のある歴史的地名がなくなり、残念な思いです。

実家のある鹿野町は戦国時代の武将・亀井茲矩（これのり）が秀吉からこの地を拝領、敬虔な仏教徒であった茲矩は釈迦が悟りをひらき、初めて説法を行った鹿野苑に因み、“鹿野”と名付けました。小ぶりながら江戸時代の町並みと町名がそのまま残り、春の祭礼に当時をしのぶ武者行列と山車巡行があり、この日を楽しみに帰省する町出身者が多くいます。茲矩は幕府の朱印状を得てシャムと交易を行なうなど、世界に視野をおいた実業家でもあり、行政面に優れた領主として、今でも「かめいさん」と親しまれています。嫡子・政矩が石見津和野藩に転封された縁で、津和野とは姉妹町として文化交流をしています。こんな鹿野町を、司馬遼太郎は“街道をゆく”（27）“因幡・伯耆の道”に紹介していますので、是非ご一読ください。

鳥取名産“まつばがに”と“二十世紀梨”は子ども時代には、ごくありふれたもののものでした。いま“まつばがに”は高価になり過ぎ、私には店先で見ただけのもの。梨は生産農家が減少、いつまで安定供給できるか心配ですが、台湾では大人気とか。また、湯梨浜町の“砂丘スイカ”はドバイで 3 万円とのこと。農産物は海外に活路を求める動きが活発なようです。鳥取は“ちくわ”の生産量と消費量が全国一で、なかでも“とうふ竹輪”は安価（1 本 130 円ほど）でおいしくおすすめ。

高齢化による限界集落のことなどの心配もありますが、今も変わらない豊かな自然と人情あふれる“とっとり”です。そんなとっとりへぜひ“きなんせえ”（お出でください）。

今年は花見三昧

2 班 古 荘 光 子

3 月エコバスツアーで伊吹山麓のセツブンソウ祭に行った。セツブンソウの萼が 4 枚から 10 枚のものや 1 茎 2 花もあった。セツブンソウとキバナノアマナが一面咲いていた。

4 月のエコバスは今庄のカタクリ。講師の岡田先生が「カタクリが咲いていなくて・・・」と申し訳なさそうに何度もおっしゃったが、イカリソウの群生が嬉しかった。

5 月 3 日は室生寺と長谷寺に行く。勤務先の有った最低の山築港の天保山にちなんだハイキングの会、「築港山岳会」(名前はすごーい。)退職してからも年に数回声がかかる。花見を兼ねて気軽に歩く。(自主活動休んで御免なさい。)石楠花が咲き始め、ボタンが満開であった。「ボタン祭なのに牡丹が終わってしまったことがある」の法話が今年は印象的。本当に今年の花は早い。

造幣局の通り抜けの「普賢象」と「御衣黄」を見に行く。まだ 2 日目なのにもう満開。

5 日はならなぎの例会日。去年は今一つであったフジが満開。南円堂の八重の藤はみごとだった。飛火野ではすっかり花に囲まれたフジの木もたくさんある。新緑の春日大社の「砂ずりの藤」は延びる時に寒さがあったので、今一つの長さだった。菩提院のナンジャモンジャの白が美しい。

連休明けは佐渡。2 年前にカタクリの群生を見たので、楽しみに出かけた。予想通り、佐渡は花の島であった。カタクリ・ヒトリシズカ・ニリンソウ・オドリコソウ・イカリソウ(佐渡は白花が多かった)エンレイソウ・コゴミとイノデ・シラネアオイ・アラゲヒョウタンボク・フキノトウ・ミスミソウ。どれもこれも「・・・通り」と名づけられる程の群生だった。今年は変な気温の日々であるが、自然は常に美しい!



(佐渡で見たヤマトグサ)

シナノキ

3 班 宮澤 富美雄

シニア自然大学校に入って間もない頃、ある場所で「これはシナノキという木です。シナノというように長野県の県木です。」という説明を受けた。「えっ、信濃＝シナノキ?」知らなかった!! 長野県生まれなのに、①シナノキという名前を初めて知った。②それが県木だとは知らなかった。

『信州人らしからぬ信州人』と揶揄される自分ではあるけれど・・・、シナノキを知らないのは自分だけ・・・?

調べてみると、信州・信濃・長野県は、かつて「科野」と記したが、それはシナノキを多く産出したからだという。なるほど。

「科野」の語源については諸説あるが、江戸時代の国学者・谷川士清の「日本書紀通證」に「科の木この国に出づ」と記し、加茂真淵の「冠辞考」にも「(一説では)ここ科野という国の名も、この木より出たるなり」と記されており、「科の木」に由来する説が古くから有力とされている由。

なんでも、7 世紀末の藤原宮跡から出土した木簡に「科野」の記載があるとのこと。しかし、「科野」は和銅 6 年(713 年)の『風土記』を境に「信野」を経て「信濃」へと移り変わっただけらしい。

すると、長野県にシナノキが多くあった、というのは、いったいいつ頃のことなのだろう。今もこの木はたくさんあるのだろうか。確かに松本市内には、街路樹として植えられている場所もあるけれど・・・。

一方、この木は北海道の森林に多く、「シナ」はアイヌ語の「結ぶ、縛る」という意味なのだという。ますます分からなくなる。

そんなことを思っていた頃、再び「シナノキは長野県の県木で・・・」の説明を受けた。

大丈夫。今度はちゃんと調べていました。長野県の県木はシラカバであり、シナノキは『長野市の市木』なのです。

吹田市江坂・今昔

4班 馬場 昭子

地下鉄御堂筋線の終点江坂からは、千里中央まで北大阪急行に変わり別料金になります。

江坂は万博までは榎阪と書き、榎原・榎谷さんなどの苗字が多く、榎木町・榎木橋もあるので、昔、榎の大木でもあったのかと歴史博物館で調べてもらいましたが、わかりませんでした。ずいぶん大昔なのでしょう。お年寄りの方もご存じありませんでした。

我が家の畑地がこの地にあったので取りあえずの住居を建て、生後2か月の娘と共に、1970年万博で開通するのに合わせて、1月に引っ越してきました。江坂に来てまずびっくりしたのは、雪がよく降り、寒かったことです。そして今では考えられないのですが、電話が通じるまで一か月以上掛ったのです。周りはみんな田んぼ、隣近所もなく、育児相談など母への電話だけが頼りなのに、心細い限りでした。

駅は開通当初北側のみ改札口が開けられ、時間も限られていました。地域のみんなで署名運動をし、南改札が使えるまで1～2年掛ったように思います。駅長室を訪ね、南口が開かれたのは何年か資料を調べていただきましたが、知る人もなくこれわかりませんでした。

大阪の街中育ちの私にとって、新しい田舎が出来たような周りの状況は、不便な反面とても新鮮で、子供と一緒に虫や犬・猫・小鳥などを飼い、駅までの道は区画整理で整然としているものの、田んぼにはレンゲが咲き乱れ、どこへ行くのも寄り道ばかりしていました。大同生命・ダイエー本社ビル・東急ハンズが出来、以後バブル期には本社をここに移す会社が一時期急増え、一気に人が多くなりました。

万博から40数年、駅のホームから我が家が見えていたくらいの田舎町が、今では1日の乗降客なんと10万人、オフィス・マンション・予備校・居酒屋の入った雑居ビルが隙間なく立ち並び、駅前はあると言う間に、夜も眠らない繁華街になってしまったのです。

そんな人の多さを少し鬱陶しくも感じながら、何処へ行くのも便利な江坂は離れられません。今のマンション住まいになって20年、駅から8分ゆったりの歩道を一直線です。

数十年前の古い写真が無いのですが、これは10年ほど前まで駅までの歩道脇、ビルの谷間にあった

田んぼの案山子です。この案山子の家族は、全員歩道に向いて一列に立てられています。毎日の仕事の



行き帰りに、いってらっしゃい！おかえりなさい！と言ってもらっているようで、ずいぶん癒されました。その後はビルに変わりましたが、こことは別に、今でも新御堂筋に面した一等地のビルの谷間に残ったわずか3か所の田んぼは、きれいに耕されて、今年も田植えが始まるようで、ホッとしています。ビル群と稲刈りは時々TVや新聞に出るほど、江坂駅前の象徴となっています。

まだまだ駅から5分も離れると、幾つも田んぼが残っていますが、それも一つ減り二つ減りと、マンションに変わっていくのは寂しい限りです。写真は現在の駅前です。



最近の所感

3班 田村 光圀

1.「さすがにと思ったこと」・・・先日、小学校の同窓会に行きました。ここ5年毎年開催ありますが先生の参加はなく、今回幹事の努力で5年時担任の先生のご出席を得ました。先生との再会は60年振りで、皆、先生のお顔も分かりません。兎に角、顔がフックラした体育系の元気な男の先生やとの印象で、先生の渾名は体操時よく言われた「ブリッジ」やったよと誰かが言いました。

当時の先生は、初めての赴任先の学校での担任で、我々とは、10歳位しか離れておりません。お会いしますと昔と違い顔はホッソリとされていましたが、目元で先生だと分かり、我々の兄さんという感じでした。話されると昔の元気な声が再現され、たった1年だけの担任なのにいろいろと当時の思い出を話され、参加者15名全員が感動し、やっぱり先生というのは偉いものだと思ひきりでした。次会での再会を約束しました。

2.「初めての体験で感動」・・・先日、日本緑茶発祥の地、宇治田原町でのイベント「お茶摘み体験」に11期緑3班のメンバーで参加しました。暑い中でしたが、2時間の茶摘みは、お喋りを交わしながらの楽しい初体験でした。続いて茶香服(ちゃかぶき)も初体験しました。「茶香服の本来は茶を飲みその茶の産地を当てる競技」のようですが、今回は4種類のお茶を5回(内同種が2回)飲み、1種類のお茶を当てるゲームでした。種類は、玉露、玄米、若葉(煎茶)、かりがね(茎箇所玉露)の4種で2回出された若葉を当てる事でした。全てのお茶を熱湯で出すため、味が分かりにくく5回中、3回しか当りませんでした。この後、「美味しい茶の入れ方」を教わり、種類により入れる湯の温度で、旨味、甘味、渋味が異なることも確認出来ました。又、水だしのお茶では、使う水は水道水の方が保存が良いことも知りました。

「石臼での抹茶挽き」では、引き方により味が違うこと、茶の立て方(泡立ち)で味が異なることも、自ら抹茶を4杯点てて飲み、実感出来ました。

私の手前勝手な結論は、美味しいお茶は、少量を頂くのが良く、喉が渇き大量に飲むのは、薄味のペットボトルの茶が良いなと思いました。

2013夏俳句

谷坂 修二

ころりとも落ちずにしがむ雪椿
ヒサカキが服にしみこむハイキング
ウグイスも紫霞む山サツキ
ちんとんしゃん藤噴き上がり山踊る
青空が新緑透視なほ青し

西村 英男

川柳

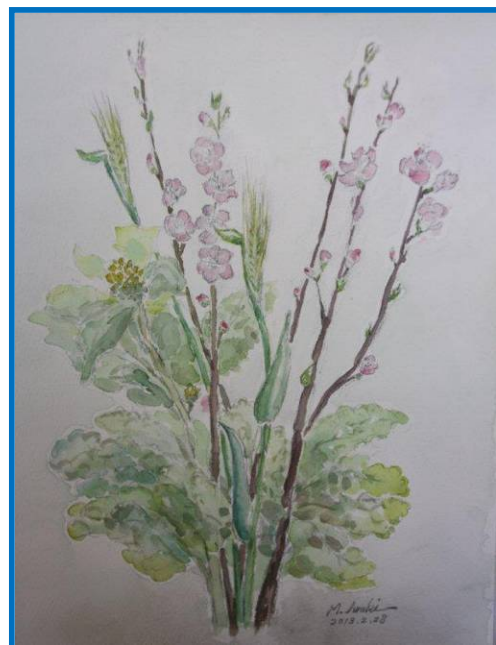
美芽求めルーペ片手にシニア行く
今日もまた一つ憶えて二忘れ
俳句
止々呂美の山並み彩るエドヒガン

吉野 久司 ペンネーム「ハチの子」

(能勢妙見山観察会にて)
オオルリに導かれつつ山下りる
(箕面自主観察会にて)
新緑を切り裂くようにフジの滝

山上 恵子

道端の童の像の日除け帽
急に來し薄暑に迷ふ旅支度
万緑の中にかがみし忠烈祠
紫陽花に蝸牛一点絵となりぬ
青空の青より青し七変化



岩城 正大
水彩画

16号たよりの紙面の都合で作品の時期とずれてしまいましたことお詫び致します。

自然と文化だより

皆様のご協力により17号が発行出来ました。次号をお楽しみに！(広報委員会)